

# 日英比較言語学の実践Ⅱ

——「顔」と face を使った熟語について——

日 野 資 成

## 0. はじめに

前回の論文「日英比較言語学の実践1」では、「口」を使った熟語と mouth を使った熟語を比較してその相違点，類似点を論じ，さらに日米の文化の相違についても述べた。今回は、「顔」を使った熟語と face を使った熟語を同様に比較検討してみたい。今回特に「顔」を使った熟語と face を使った熟語を取り上げたのは，同じ人体名称の一部であっても，前回は主として日米の相違点が明らかになったのに対し，今回は，殊に比喩表現において日米に多くの類似点が見つかったからである。

「顔」を使った熟語の用例は『学研国語大辞典』（1978年），『からだことば辞典』（2003年）より，mouth を使った熟語の用例は A Dictionary of American Idioms（1987年），『しぐさの英語表現辞典』（1991年）より引用した。

「顔」を使った熟語と face を使った熟語を比べるのに，まず「顔」と face が熟語の中で換喩的に用いられている例を1節で比べ，次に比喩的に使われている例を2節で検討する。最後に3節では，1節と2節で検討した例をもとに，日米の文化の類似点について述べたい。

## 1. 換喩的用法

換喩（メトニミー）というのは、同じ語の指す対象が置き換わることである。「顔」の場合、「顔」がその人を表す代表的部分であることから、その人そのものを指すようになる。以下にその例と換喩的意味（顔の意味を「 」で示す）を挙げる。

熟語	換喩的意味
顔がそろう	「何かを代表する人物」がそろう。
顔を合わせる	「人と人」がどこかで会う。
顔を貸す	ターゲットとなる「人」を連れ出す。
顔を売る	「ある人自身」を売りこむ

「顔」が「人」を指すようになったのは、「顔」には人間にとって大切な五官をつかさどる体の部分のうち4つが集まっており（視覚をつかさどる「目」、聴覚をつかさどる「耳」、嗅覚をつかさどる「鼻」、味覚をつかさどる「口」）、「顔」が人間の感情が直接表れるところであるからであろう。

英語の face が「人」を指す用法は見られなかった。一方、face は **face of the earth**（地球の表面）、**face of the building**（建物の正面）などのように「ものの表面」を表す用例がある。これは、顔が表面を持つことから、表面を指すようになる換喩的变化である。この場合、顔全体を指していた語が顔の部分である表面を指すようになる変化で、これをシネクドキ（全体が部分を表したり、部分が全体を表したりする換喩的变化）という。日本語の「顔」にはこの用法はないが、漢語の「面」がこれを補っている。「面」ももともとは「面と向かう」のように「顔」を指していたが、「表面」「海面」のように「ものの上の部分」を指すようになった。

## 2. 比喩的用法

比喩（メタファー）というのは、「あるものを他の似ているものにたとえ

ること」で、比喩的变化というのは、ある具体的なものから、それと似た抽象的なものへ意味が変化することである。前回同様、目に見える「物理的」な意味から、目に見えない「心理的」な意味に変化する「物理的>心理的」というパターンと、目に見える「もの」から目に見えない「こと」（ことから）に変化する「もの>こと」というパターンの二つを使用する。

## 2.1 「物理的>心理的」

「顔」を使った日本語の熟語と face を使った英語の熟語を対比させながら見てみたい。

「顔」を使った熟語で、このパターンに当てはまるものを挙げよう。まず、「顔をよごす」は物理的には「顔を泥できたなくする」という意味であるが、「Aさんは私の顔をよごした」といった場合、心理的に「人の名誉を傷つける」という意味に変化している。「顔に泥を塗る」も同様の变化をしている。

「顔をよごす」「顔に泥を塗る」は、物理的に「顔に損害を与える」ことで、その点で、英語の slap in the face に似ている。slap in one's face も文字通りの「顔をピシヤリと平手でうつ」という物理的な意味から、John **slapped our club in the face** by saying that everyone in it was stupid.（ジョンは「会員はみんなばかだ」と言って、われわれのクラブを中傷した）のように人の心を傷つけるという心理的な意味に変化している。

これらとは反対に、「私はAの顔を立ててあげた」などの「顔を立てる」といえば、物理的な意味「顔を真っ直ぐに立てる」から心理的に意味「人の名誉を守る」に変化している。「立てる」とはそれまで「倒れていたものを垂直に置く」という物理的なプラスイメージから、心理的にも「名誉を守る」というプラスイメージに転じている。これは、英語の Bill would not play in the game because he knew he could not do well and he wanted to **save face**.（ビルは、試合では上手くいかないし面目も保ちたかったから、試合に出なかった）などの save face（面目を保つ）に対応している。

次に、「顔をつぶす」も物理的には「顔をペシャンコにする」という意味

であるが、「私は A さんに顔をつぶされた」の場合は心理的に「人の名誉を著しく傷つける」という意味である。その自動詞形の「顔がつぶれる」も同様である。「面目まるつぶれ」などともいう。この場合「面」は漢語で「顔」という意味で使われている。英語の *John's careless work made him lose face with his employer.* (ジョンはいいかげんな仕事をして雇用者の信頼を失った) などの *lose face* (面目を失う) がこれに対応している。

次に顔の表情を表す熟語を挙げよう。まず、日本語の「顔がこわばる」は、物理的な「顔の筋肉が固くなる」という意味から転じて心理的に「緊張した」状態を表す。英語にもこれに対応する熟語として *one's face tightens*, *one's face hardens*, *one's face stiffens*, *one's face narrows* がある。*one's face tightens* の例を挙げる。Then **his face tightened** in concentration and irritably pushed his glasses up on his forehead and brought the picture close to his face. [(真相解明につながる写真を見せられ) 男は顔をぐっと引き締め、食い入るようにながめる。やがていらいらしながら眼鏡を額に押し上げ、写真を顔に近づけて見る] (A. Hyde *The Red Fox* より)。この反対語の「顔が和らぐ」は英語の *one's face softens* に対応する。

また、「顔がゆがむ」は物理的に「ゆがんだ顔」から苦しい心理状態を表す。これは英語の *one's face is contorted* にあたる。Dr. Schneider was getting to his feet, **his face contorted** with indignation. (シュナイダー博士は怒りに顔をゆがませて立ち上がった) (R. Macdonald *The Dark Tunnel* より)。

さらに、日本語で「顔がくしゃくしゃになる」は物理的な「しわだらけの顔」から転じて、笑顔でうれしい気持ち、涙で悲しい気持ちを表す。英語では *one's face crinkles* が「うれしくて顔がくしゃくしゃになる」、*one's face crumples* が「悲しくて顔がくしゃくしゃになる」という意味を表す。Bill laughed, his very ordinary **face crinkling**. (ビルが笑うと、特徴のないその顔がくしゃくしゃとなる) (J. Deveraux *The Princess* より)。Emma's **face crumpled**. [(父の死を知らされ) 娘エマの顔はくしゃくしゃとなる] (B.T. Bradford *A Woman of Substance* より)。

このほか、「顔が曇る」が *one's face clouds* に、「顔が晴れる」が *one's face clears* に対応するなど、天気を用いた比喩も日米共通である。

## 2.2. 「もの>こと」

「顔」を使った熟語では、まず「Aはパーティーに顔を出した」などの「顔を出す」がある。これは、物理的には「亀のように隠れた顔を見えるようにする」という意味であるが、転じて「現れる」ということがらを表している。「Aはパーティーに顔を見せた」の「顔を見せる」も、物理的「顔を見えるようにする」という意味から「現れる」の意味に転じている。英語の *He didn't show his face yesterday* (彼はきのう顔を見せなかった) などの *show one's face* は、まさに「顔を見せる」に対応している。

顔の表情を表す熟語にもこの変化が見られる。「顔」を使った熟語の場合、「大きい顔をする」の「大きい顔」は、文字どおり大きい顔(「もの」)から「無遠慮で威張った態度」という「こと」(ことがら)に変化している。「涼しい顔をする」の「涼しい顔」の場合も暑さをしのぐ「涼しい」という物理的状態を表す語によって「自分もその事柄に関係していながら、何の関係もないというような様子」(こと)を表している。

顔の表情を表す「大きな顔」「涼しい顔」はどちらも形容詞が名詞「顔」を修飾する形式であるが、英語にも同じ形式の用法がある。まず、*long face* (長い顔)は、*He told a story with a long face* (彼は悲しそうに話した)のように「悲しい様子」を表す。これは、悲しいときの表情、あごを少し下して鼻の下をのばした表情を見ると顔が永く見えるからである。

さらに、*straight face*(真直ぐな顔)は、*Mary told all the funny stories she knew to try to make Joan laugh, but Joan kept a straight face.* (マリーは、知っている限りの面白い話をしてジョアンを笑わそうとしたが、ジョアンは笑わなかった)のように「笑いもしないまじめな様子」を表す。これは日本語の「真顔」に対応している。

### 3. まとめ

1節では、「顔」が人を代表する部分であることから「人」を指す換喩的用法を検討した。英語の face には「人」を指す用法がなかった。一方英語の face には、「ものの表面」を指す用法があった。

第2節の比喩的用法では、2.1で、「顔」を使った熟語が文字通りの物理的意味から、対面や信用にかかわる心理的な意味に変化した例を指摘した。face を使った熟語も同様であった。殊に、「顔を立てる」が save one's face に、「顔をつぶす」が lose one's face に対応しているのは、日米同じ発想にもとづくもので興味深い。顔の表情を表す熟語にも、「顔がこわばる」と one's face tightens, 「顔がゆがむ」と one's face is contorted, 「顔が曇る」と one's face clouds など、多くの熟語に対応関係が見られた。また、2.2でも、「もの」から「こと」に転じている例として、日本語の「顔を見せる」を挙げたが、これも英語の show one's face に対応している。さらに、英語の straight face が「真顔」に対応することも指摘した。

前回の「口」と mouth を使った熟語では、日米で相違点が目立ったが、今回は、以上述べたように、比喩表現において類似点が多かった。

最後に、「顔」を使った、顔の表情を表す熟語を次に挙げる。

知らん顔, 浮かぬ顔, 苦虫を噛み潰したような顔, 顔をくもらす,  
顔をこわばらせる, 顔がゆがむ, 顔をしかめる, 顔が晴れる, 顔が曇る,  
顔をほころばせる

「顔をほころばせる」, 「顔が晴れる」以外はあまりいい顔ではない。英語でも make a face (しかめっ面をする), put a good face on (見かけをよくする), one's face tightens (顔をこわばらせる), one's face is contorted (顔がゆがむ), one's face is haggard (顔がやつれている), long face (悲しい顔), straight face (笑わない顔) など、マイナスイメージの顔を表す熟語が多い。前回の「口」と mouth を使った熟語では、「口」だけがマイナスイメージを持つ熟語が多いことを指摘したが、今回は日米どちらもマイナスイメージを持つ熟

語が多いことがわかった。

一般的には、アメリカ人の方が日本人よりも顔の表情がオーバーで豊かであると言われるが、これはあくまで程度問題で、顔に現れる喜怒哀楽の情には、日米間、あるいは人間間であまり差がないのではないかと思われる。それにしても、今回喜怒哀楽の「哀」の情を表す熟語が日米間で目立った。日米ともに、人生、楽しいことよりもつらいことの方が多いのであろうか。確かに、新聞をにぎわすのは暗い事件が多い。しかし、「笑う角には福来る」である。笑顔で楽しく人生を過ごしたいものである。

#### 参考文献

- 学研国語大辞典 金田一春彦・池田弥三郎編 学習研究社 1978年  
からだことば辞典 東郷吉男編 2003年 東京堂出版  
しぐさの英語表現辞典 小林祐子編 1991年 研究社  
A Dictionary of American Idioms. 1987. ed. by Adam Makkai. New York : Barron's.  
Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer. 1991. From cognition to grammar : Evidence from African languages. In Traugott and Heine eds., vol.1 : 149-187.  
Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago : University of Chicago Press.  
Traugott, Elizabeth and Bernd Heine eds. 1991. *Approaches to grammaticalization*. 2 vols. Amsterdam : Benjamins.